

子どもの心理評価のためのバウムテストの有用性（Ⅱ）

—中学3年生の自尊心との関連性に着目して—

小椋佐奈衣

抄録：バウムテストは人格診断のための補助手段として、臨床場面・教育場面などで取り入れられている。本研究は子どもの自尊心とバウムテストの特徴に着目して、その関連性の検討を目的とする。本調査は公立の小学校4年生と中学校3年生を対象として実施した。小学校4年生の調査結果は、「子どもの心理評価のためのバウムテストの有用性—児童用コンピテンス尺度とテストバッテリーによる検討—」を題目として、既に論文で報告をした。本稿は、中学校3年生210名を対象として、自尊感情尺度とバウムテストのテストバッテリーの結果を報告する。調査対象について、バウムテストの有効数から自尊感情尺度の得点を、低得点群と高得点群に分類した。両群についてバウムテストの各指標の出現率を集計した。両群間の出現率の有意差について、直接確率計算を用いて統計解析を行った。その結果、低得点群は高得点群に比べて、木の「全体的位置（左）」「枝（一本線）」「樹冠の輪郭（西洋梨）（まる）」の出現率が有意に高かった。一方、高得点群は低得点群に比べて、木の「実（大）」の出現率が有意に高く、「樹冠の輪郭（アーケード）（その他）」「幹（太）」の出現率が有意に高い傾向が見られた。本研究の結果から、中学生の自尊心とバウムテストの特徴の関連性が示唆された。

キーワード：中学3年生、自尊心、バウムテスト、テストバッテリー

1. はじめに

生徒の自尊心について、井上信子（1987：38）は「現代の子どもたちが優劣意識を抱く最大の要因は能力要因であり、それはいずれの場合も学校場面で能力を評価される時、最も意識されることが判っている」と述べている。また、社会への適応力は学校教育における児童・生徒の個性の伸張とともに「能力要因」であることも報告している（井上1987：38）。子どもの能力要因として、自尊心は学校生活への適応や成績の自己評価を高めることで、自己実現に向けて目的を達成しようとする意欲を持つであろう。また、知的な発達だけでなく、学校社会の対人関係の構築にも、自尊心はある程度高いことが必要とであると考えられる。したがって、自尊心の高低やその変化を知ることは、教育現場で重要な課題であると考えられる。

上述のことから、児童・生徒は学校という社会的場面で、個々の能力を評価されることによって、自尊心に優劣意識を抱くことになる（井上1987：38）と考えられる。優劣意識が関わり合う要因には、学校での評価環境があげられる（桜井茂男1986：342）。特に、中学3年生が劣等意識を強く抱き自信をなくした場合、学力評価に基づく高校受験などの進路問題が課題となる。その他の課題として、不登校傾向および学校生活に満足していない者は、自尊心が低い（粕谷貴志・川村茂雄2004：107）ことが報告されている。前述に基づき、自尊心の低下は不登校などの不適応状態に陥る傾向にあると考えられる。そのため、教育現場では不適応状態に気付いて、早期に対応することが必要である。さらに、自尊心を向上させることも必要である。一方で、自尊心の低い子どもの人格的特徴を理解する

ことも重要である。

上述の背景に基づき、中学生の自尊心の高低が教育場面に影響すると考えられる。こうしたことから、筆者は教育場面における中学生の自尊心の重要性を俯瞰的に鑑みた。そこで、本研究は中学3年生の人格的特徴と自尊心の高低の関連性に焦点を当てる。生徒の自尊心の測定は自尊感情尺度を用いて、バウムテストとのテストバッテリーを試みる。人格的特徴の評価として、バウムテストは人格診断のための補助手段として、臨床場面・教育場面などで取り入れられている。このテストは、非言語性であることから、言語による感情や欲求の表出ができない子どもの心理状態の解釈にも有効である。また、描画上には、描いた子どもの精神発達の様相や人格的成長や退行等が投映される。このように、バウムテストは人格的・精神的側面を窺い知る手段としても有効視されている（山下1982：23）。以上のことから、本研究は中学生3年生の自尊心とバウムテストの特徴に着目する。

2. 目的

2.1 本研究の目的

本研究の目的は、中学3年生の自尊心とバウムテストの特徴に着目して、その関連性の検討をする。バウムテストは学校臨床場面で使用する際、質問紙法との併用がきわめて有効である（田山2008：1033）ことが示唆されている。本稿は自尊感情尺度とバウムテストとのテストバッテリーから、自尊心の高低がバウムテストの描画の特徴に及ぼす影響について論じる。

バウムテストは、子どもを対象とした人格検査に用いられやすい（北山陽子・窪木恵子1988：17）。検査方法は非言語性である。そのため、言語表出の苦手な子どもの心理状態の解釈に有効である。検査方法が簡便で極めて侵襲性が低く、施行の際に生じる抵抗も小さい（村田陽子2002：96）ことから、学校現場でも簡便に行うことができる（田山2008：1033）。バウムテストのメリットとして、実施と採点が容易であり短時間のうちに多くの資料が得られ、結果が客観的に見られる（花沢誠一・佐藤誠・大村政男2006：191）。前述から、バウムテストと質問紙法のテストバッテリーによって、より詳細な調査結果が得られると考えられる。さらに、バウムテストを用いることで、質問紙法のみでは得ることのできない子ども特有のパーソナリティ特性を明らかにする（田山2008：1033）ことも可能である。したがって、バウムテストは生徒の意識下の心理状況を知る手段として、言語化の表現ができない場合においても、投映法としての強みが活かされることが考えられる。

本研究において、中学校3年生を調査する際、自尊心の高低について肯定的評価だけでなく否定的評価の含めている（佐藤淑子2009：5）という視点から、自尊感情尺度の質問紙法を実施する。また、自尊感情尺度の質問紙法とバウムテストを同時に実施することで、生徒の心理状態をより把握できると考えられる。前述に基づき、本研究は、中学3年生のバウムテストに表れる自尊感情尺度の低得点群（以下：低群）と高得点群（以下：高群）の特徴について、その関連性を検討することを目的とする。さらに、バウムテストの年齢的発達変化を識別するために、女子大学生を対象とした先行研究の知見と本研究の結果を比較検討し、バウムテストの年齢的発達変化の有無を解明する。

本稿は、バウムテストの有用性を検証するための研究として、第2報告に位置付くものである。そのため、第1報告として、小椋2021aでまとめた自尊心の定義、バウムテストの概要・メリット、先行研究の知見について再掲する。

2.2 自尊心の定義

自尊心の定義について、先行研究の知見では様々な立場から述べている。その定義は表1に示す。

表1. 先行研究における自尊心の定義

定 義
自分らしく生きるための基盤となる自己価値観である (井上信子 1986 : 10).
人格性絶対価値, すなわち尊厳を自己において認める意識である (蘭 千尋 1992 : 78).
自己への肯定的評価である (遠藤辰夫 1992 : 79).
肯定的評価だけでなく, 否定的評価も含めたものである (佐藤淑子 2009 : 5).
セルフ・エスティームとほぼ同義で用いられている。自己に対する評価感情であり, 自分自身を基本的に価値あるとする感覚である (村田陽子 2002 : 89).

中学3年生は高校受験による進路意識が高まり, 優劣意識を抱く (井上 1987 : 38) 時期である。上述から, 本研究では自尊心の高低について「肯定的評価だけでなく否定的評価も含めたものである (佐藤 2009 : 5)」の定義を採用する。自尊心の高低は優劣意識を評価する自尊感情尺度を用いる。

2.3 バウムテストについて

バウムテストは, 描いた人の樹木画からその人のパーソナリティが映しだされるという心理アセスメント法であり (中島ナオミ 2006 : 1), 投映描画法に属する人格検査の一つである。バウムテストの創案者は Jucker, E. である (佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 2010 : 12)。その後, 1949年スイスの心理学者である Kock, K. によって体系化された。我が国へは 1961年に導入され, 1970年に英語版の日本語版 (林ら訳 1970) が公刊された。以来, 臨床・教育・産業などの場で幅広く利用されている (中島 2006 : 1)。「バウム」とはドイツ語で樹木を意味する。検査方法は, 実のなる木を自由に描かせて実施する樹木画のテストである。手続きは, 被験者に「実のなる木を一本描いてください」(ボーランダー 2010 : 40) という指示で実施される。描かれた樹木画は, 形態・筆圧や運筆・用紙上で位置などの空間象徴の理論的基礎 (田中彰吾 2008 : 1) から, 多種多様な特徴を読み取って解釈される (カール・コッホ/林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) 1980 : 117)。

バウムテストの有効性について, 施行の際に生じる抵抗も小さい (島田藍 2006 : 285) ことから, 子どもの心理的負担が少なく極めて侵襲性が低いというメリットを持つ (塩崎洋子・宮下敏恵 2007 : 193)。検査方法が簡便性であることから, 子どもを対象とした性格検査に用いられやすい (北山陽子・窪木恵子 1988 : 17)。また, 非言語性の検査であるため, 言語による感情や欲求の表出ができない子どもの心理状態の解釈に有効である。描画上には, 描いた子どもの精神発達の様相や人格的成長や退行等が投映される。こうしたことから, 発達の側面を窺い知る手段としても有効視されている (山下 1982 : 23)。主に, 人格診断のための補助手段として, 臨床場面・教育場面などで取り入れられている (山下真理子 1982 : 23)。前述に基づき, バウムテストは言語能力の乏しい幼児にも実施可能であり, 幼稚園児, 小学生, 中学生にも施行されてきた。さらに, 普通児と精神薄弱児との比較, 聾児や非行少年の研究に用いられてきた経緯がある。

バウムテストに関する国内の研究では, 1958年から2009年迄, 論文696本について検証されている (佐渡・坂本・伊藤 (2010 : 12)。その研究内容と研究方法の観点から, 数量的に検討した研究

では、各研究の独立変数と対象者の属性を踏まえた19の分類基準と、研究方法について分析法に焦点を当てた5つの分類基準が設定されている。これまでの検証から、バウムテストは科学的な研究として、一定の評価を得るための技法であることを示唆している（佐渡・坂本・伊藤 2010：17）。

上述に基づき、本研究の位置付けは以下の通りである。本研究では自尊心を自尊感情尺度で測定している。その上で、自尊心の高低を群分けしてバウムテストの特徴を整理している。すなわち、研究内容はバウムテストの指標の検討や提示、整理に関する分析法に属する。研究方法は質問紙法で自尊心を数量化して分類している。したがって、本研究は分析法による数量化研究に属する。

2.4 先行研究の知見

バウムテストに関する先行研究は、幼児や児童を中心として樹木画の個々の発達指標の出現率と年齢との関係を統計的に検討した（山下 1982:25）研究が主である。中学生を対象とした先行研究では、バウムテストの特徴と心理特性や行動に関する研究報告もあり、その関連性は実証されている。本研究では、中学生の行動特性と自尊心に関する先行研究の知見を抜粋する。

田山淳（2008：1033）の研究では、「中学生における登校行動とバウムテストの関連について」報告している。登校行動を規定する要因として、内的要因を想定して登校行動良好群と登校行動不良群におけるバウムテストの結果を比較検討した。登校行動良好群と登校行動不良群で差が見られた項目は「筆圧（薄・弱・細・軽）」「角ばった樹冠」の項目が登校行動不良群において、登校行動良好群に比べ出現率が高くなっていった。逆に登校行動良好群で登校行動不良群に比べ「まるい樹冠」の出現率が高くなっていった。粕谷・川村（2004：107）は「不登校傾向および学校生活に満足していない者では自尊感情が低い」と述べている。この研究を通して田山（2008：1033）は、「バウムテストを利用した心理アセスメントは、学校現場でも簡便に行うことができるというメリットがある。バウムテストを用いて、不登校の前段階である登校行動の不良な児童の特有なパーソナリティ特性を明らかにすることにより、不登校に対する予防的な関わりを具体化できる可能性がある」と論じている。

大学生を対象としたバウムテストとセルフ・エスティームの関連の研究では以下の報告がある。

村田（2002:95）の研究では、女子大学生を対象にセルフ・エスティームを4つの因子に分けている。「他者評価への過敏性」「社会場面での不安」「否定的自己評価」「肯定的自己評価」の各因子とバウムテストとの関連性を検討した結果、「否定的自己評価」の因子に、大きい葉・実・花や左縁の空間使用量など、多くの指標や項目で有意差が認められた。この結果から、セルフ・エスティームは否定的自己評価というネガティブな側面が表現されやすいことが示唆された。また、セルフ・エスティームの高い人は、低い人と比べて黒色バウムテスト、色彩バウムテスト共に用紙の右半分を多く使用し、幹の中心位置が右寄りに描くことが判った（村田 2002：95）。

上述の先行研究に基づき、本研究の課題は、以下の2点を提起する。

- ① 田山（2008：1033）の研究から、質問紙法バウムテストを同時に実施した結果、生徒の行動評定とバウムテストの特徴が解明された。また、学校生活場面では児童・とバウムテストの出現率の関連性について、その指標が明らかにされた。しかし、中学生の自尊心とバウムテストの関連性は明らかにされていない。
- ② 村田（2002：96）の研究から、自尊心の高い人は右寄りが多いという空間使用量の結果が述べられている。しかし、自尊心の高い人のバウムテストの特徴の結果は明らかにされていない。

したがって、本研究では中学生の自尊心の高低とバウムテストの指標の関連性について検討する。本研究の調査項目は、自尊心の高低を測るために「自尊感情尺度」を使用する。「自尊感情尺度」と「バウムテスト」のテストバッテリーを試みることにより、その関連性をより詳細に把握できると考えられる。分析はバウムテストの整理表（国吉・林・一谷・津田・斎藤 1980：42）に基づき 104 項目を検討する。本研究はバウムテストの描画の全体像から、第 1 の目的は自尊心の高低の特徴の解明をする。第 2 の目的は女子大学生の先行研究の知見に基づき、中学校 3 年生と女子大学生のバウムテストの特徴を比較して共通性の有無を検討する。

本研究の仮説は以下の通りである。

- ① 中学校 3 年生は女子大学生と同様に「立体描写」「前に突き出た枝」「実・葉が少ない」「根の閉鎖」「地平の草むら」「筆圧強」の 6 項目において、自尊心の低群で高い出現率となる。

3. 方法

3.1 調査対象

調査対象者は E 市内の公立中学校 3 年生 210 名で、そのうち有効数は 209 名であった。男子 102 名、女子 107 名であった。

3.2 調査時期

調査は 2010 年 7 月の一学期の期末テスト終了後、7 月 20 日から 24 日迄の夏休み前に実施した。

3.3 調査手続

本調査は事前に学校管理者である学校長名で、保護者に調査実施の依頼文を配布した。依頼文の書面には、倫理的配慮として、調査内容の説明と個人情報保護法の遵守に基づき、調査で得られた個人情報学術的目的以外には使用されないことが明記されている。調査対象者の生徒については、保護者から同意を得ている。

調査手続きは、調査対象者の生徒 6 クラス（1 クラス 35 名）に対して、教示者は各クラス担任（6 名）に依頼した。実施方法はホームルームの時間を利用して、集団法で一斉に実施した。調査の順番は先に自尊感情尺度、次にバウムテストを実施した。

3.4 調査項目

3.4.1 自尊感情尺度

中学校 3 年生は、自尊心を肯定的評価だけでなく否定的評価の含めているという視点から、自尊感情尺度を使用する。自己の能力や価値について、評価的に感情測定をする尺度としてローゼンバーグ（1965）が作成した尺度の山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982：64）による邦訳版を用いた。この尺度の対象者は大学生以上の成人であるが、質問項目の内容から判断すると、高校生も回答可能であるとしている（山本・松井・山成，1982：64）。したがって、高校生は 15 歳を含む年齢であることから、中学校 3 年生（15 歳）も回答可能であると判断して使用した。

自尊感情尺度について、信頼性は大学生 644 名（男子 400 名，女子 244）のデータを主成分分析した結果、第 1 因子の寄与率が 43% あることから、尺度の内的一貫性は高いと推測される（山本・

松井・山成, 1982: 64). 妥当性は大学生 644 名 (男子 400 名, 女子 244) のデータを主成分分析した結果, 第 1 因子の寄与率が 43% であるのに対し, 第 2 因子の寄与率は 13% と低いから, 単因子構造であると考えられる. したがって, 構成概念妥当性の中の因子的妥当性は確認されている. また, 本尺度の特徴は, 質問項目数が少なく実施が容易で 1 次元性が確認されていることから, 信頼性・妥当性ともに高いと考えられる. 以上から, わが国で使用できる有用な尺度の一つである (山本・松井・山成, 1982).

自尊感情尺度の項目は逆転項目を含めて 10 項目である. 項目の内容は表 2 に示す通りである.

教示は「次のおのおのについて, あなた自身にどの程度あてはまるのかをお答え下さい。」といい, 他者からの評価でなく, あくまでも自身で自己への尊重や価値を評価し測定するものである. 選択肢は, あてはまる・・・5, ややあてはまる・・・4, どちらともいえない・・・3, ややあてはまらない・・・2, あてはまらない・・・1 までの回答で, 5 件法で自己評価させる方式をとった.

表 2. 自尊感情尺度 10 項目

1.	少なくとも人並みには, 価値のある人間である.
2.	色々な良い素質を持っている.
●3.	敗北者だと思ふことがよくある.
4.	物事を人並みには, うまくやれる.
●5.	自分には, 自慢できるところがあまりない.
6.	自分に対して肯定的である.
7.	だいたいにおいて, 自分に満足している.
●8.	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい.
●9.	自分が全くだめな人間だと思ふことがある.
●10.	何かにつけて, 自分は役に立たない人間だと思ふ.

※ 実施時には, 逆転項目を示す●マークを削除する.

3.4.2 バウムテスト

バウムテストは各自に A4 版大の画用紙と B4 の鉛筆を配布して樹木画を描いた. テスト方法は「実のなる木を一本描いてください. 画用紙は縦に使って下さい。」という教示の基に実施した. 実施の時間や生徒の対応は, 教示者である各クラスの担任の判断に任せた. 実施後, バウムテスト整理表 (国吉・林・一谷・津田・斎藤 1980: 42) に基づき, 全体的位置・幹・枝・樹冠・実・葉・根・地平・その他など 104 項目の整理を行った. これらの項目はバウムテストの特徴的指標とした. 自尊感情尺度の高低に表れる描画の特徴は, 自尊感情尺度の得点の平均値から低群と高群に分類して, 各群のバウムテストの指標の出現率の集計を行った. バウムテストの手続きは以下の通りである.

- 1) 準備は各自に A4 (210 × 297mm) の画用紙と B4 の鉛筆を配布した.
- 2) 教示は「実のなる木を一本描いてください。」とした.
- 3) 描画の後, 画用紙の裏面に姓名, 生年月日, 性別, 出席番号を記載するよう指示した.
- 4) 留意点に以下の 3 つ挙げて, 事前に教示者が調査対象者に説明した.
 - ① 時間は特に制限はないが, 教示者の判断で 10 分から 25 分程度で実施をした.
 - ② 実のなる木を描けない子どもには, どのような木でもよいと説明をし, 途中でも止めても

よいと伝えた。

- ③ 写生しないように注意した。

3.5 分析方法

自尊感情尺度は、合計点（得点可能範囲は10～50点）の平均値を算出した。平均値より低い点は低群、平均値より高い得点を高群とした。バウムテストは両群に分類して、バウムテスト整理表（国吉・林・一谷・津田・斎藤 1980：42）に基づき、各指標が見られるか否かを判断した。バウムテストに表れる特徴を整理する際、その指標の判断が難しい分析は、教示を担当したクラス担任の教諭も参加した。バウムテストの明らかな課題外の描画は11名分あった。それらは本研究の対象外とした。バウムテストの有効数から、低群と高群のバウムテストの各指標の出現率を集計し、出現率を算出した。その後、両群間の各指標の出現率の有意差の統計処理は、直接確率計算を用いた。

4. 結果

4.1 自尊感情尺度の評価

中学校3年生209名の自尊感情尺度の合計得点の平均値と標準偏差は表3に示す通りである。

自尊感情尺度の採点方法は、山本・松井・山成（1982：64）の心理測定尺度に基づき各項目で、あてはまる・・・5点、ややあてはまる・・・4点、どちらともいえない・・・3点、ややあてはまらない・・・2点、あてはまらない・・・1点として10項目の評定を単純加算した。その結果、得点可能範囲の10点～50点で結果が得られた。中学校3年生209名のうち、低群は89名で得点の平均値24.40、標準偏差3.87、高群は120名で得点の平均値33.04、標準偏差3.39であった。低群と高群の平均値の有意差についてt検定を行った結果、 $t = 17.18$ 、 $p > .10$ で有意差はなかった（表3）。

表3. 自尊感情尺度の評価の平均値、標準偏差、 α 係数

分類	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数	<i>t</i> 値
自尊感情尺度合計得点	209	29.55	5.59	.741	
自尊感情尺度低得点群	89	24.40	3.87		
自尊感情尺度高得点群	120	33.04	3.39		17.18

4.2 尺度の信頼性の検討

自尊感情尺度の10項目の得点について、中学校3年生209名の合計点の平均値を算出した。その結果、自尊心尺度の得点の平均値29.55、標準偏差5.59であった。本調査における内的整合性を検討するために、自尊感情尺度の α 係数（クロンバックの α 係数）を算出した。その結果、 $\alpha = .741$ で十分な値の内的一貫性が得られた（表3）。

4.3 中学3年生のバウムテストの特徴

中学3年生の自尊感情尺度の低群89名と高群120名との計209名のバウムテストの特徴について、両群間の有意差は直接確率計算を行った。バウムテストの出現率から自尊感情尺度の低群と高群に表れるバウムテストの特徴を比較すると、バウムテスト整理表（国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・

斎藤通明 1980 : 42) 104 項目の中、両群間で直接確率計算による有意差が見られた分析項目は、「全体的位置 (左)」「幹 (太い)」「枝 (一線枝)」「樹冠の型 (アーケード) (西洋梨) (まる) (その他)」「実 (大)」の 8 項目であった。低群は「全体的位置 (左)」「枝 (一線枝)」「樹冠の型 (西洋梨) (まる)」の項目に関して出現率が有意に高かった。高群は「幹 (太い)」「樹冠 (アーケード) (その他)」「実 (大きい)」の項目に関して出現率が有意に高かった (表 4)。したがって、仮説①について、中学校 3 年生は女子大学生の自尊心の低群で「立体描写」「前に突き出た枝」「実・葉が少ない」「根の閉鎖」「地平の草むら」「筆圧強」の 6 項目に高い出現率がある結果と一致しなかった。

表 4. 自尊感情尺度の高低に表れるバウムテストの特徴 (数値は%を示す) N = 209

分析項目	特徴	低群 (n= 89)	高群 (n=120)	p 値
全体的位置	左	25.8	6.6	.0001**
実	大	2.2	17.5	.0005**
枝	一本線	8.9	0.8	.0051*
幹	太	17.9	31.6	.0371+
樹冠	西洋梨	6.7	0.0	.0053*
	まる	6.7	0.0	.0053*
	アーケード	32.5	49.2	.0231+
	その他	5.6	14.2	.0431+

** $p < .001$; * $p < .01$; + $p < .05$.

5. 考察

バウムテストの描画の全体的位置について、本研究の低群に「左」が多いと、女子大学生の「自尊心の高い人は右寄りの描写が多い」(村田 2002 : 95) という結果から、自尊心の高低は木の全体的位置に表れると示唆された。低群に見られた枝の「一本線」はバウムテスト整理表 (国吉ら, 1980 : 42) によると、発達の遅滞と退行に関する指標である。また、樹冠の輪郭「まる」は「精神的発達の未成熟の中学生に多くみられる」(田山 2008 : 1039) ということから、自尊心の低い中学生の中には発達の遅滞の傾向の可能性があるかと窺われる。高群に多かった樹冠の輪郭「アーケード」は、コッホ (1970 : 40) の解釈では情緒面の安定性を表わす。実の「大」は成功や達成感・充実感を示す指標である。以上のことから、自尊心の高低がバウムテストの特徴に表れることが示唆された。

5.1 自尊感情尺度の低得点群の特徴

本研究結果から、特に「全体的位置 (左)」は低群で 25.8% の出現率で、自尊心の低さを示す指標であることが明らかとなった。村田 (2002 : 89) は自尊心の高い人は右寄りが多いという空間使用量についての結果を述べている。したがって、本研究と村田 (2002 : 89) の結果から「全体的位置 (右)」は自尊心の高さ、「全体的位置 (左)」は自尊心の低さを示す指標であると示唆された。前者と後者の研究結果からバウムテストに表れる自尊心の高低の特徴が顕著であった。

「樹冠 (西洋梨) (まる)」は低群で 6.7% の出現率で有意に高い項目である。田山 (2008 : 1039) は「丸い樹冠の雲型・綿菓子型の樹冠は、多くの児童にみられる通常の型であり特に精神的発達の未成熟の子どもに多くみられる」と述べている。本研究においても「樹冠 (まる)」は自尊心の低さを示す指

標であると結果が得られた。田山（2008：1039）は「樹冠（雲）」は中学生の登校行動良好群で出現率が χ^2 検定において有意に高く、登校行動不良群では角ばった樹冠が見られた」と結果を述べている。以上の研究結果の相違について、調査人数を比較すると本研究の209名に対し田山（2008：1039）は27名である。前述から、調査人数の違いが結果に影響していると考えられる。

「枝（一線枝）」は、低群で8.9%の出現率であり有意に高い項目である。バウムテスト整理表（国吉・林・一谷・津田・斎藤，1980：42）によると、（一線枝）は発達の遅滞と退行を関する指標であることから、本研究結果では自尊心の低さを示す指標であるといえる。

5.2 自尊感情尺度の高得点群の特徴

本研究の結果、「幹（太い）」は高群で31.6%の出現率で有意に高いことから、自尊心の高さを示す指標であることが明らかとなった。出現率の数値からも自尊心の高群の特徴が顕著に表れている。このことから、自尊心が高さの心理特性とバウムテストの特徴の関連性を示唆している。「実（大）」も高群で17.5%の出現率で有意に高い項目である。先行研究の知見では、「実の（多）」は気力と収穫に希望に満ちていることを示すことから、創意工夫と関連していた（田邊敏明 2007：169）。また、中学生の登校行動良好群で「実（有）」の出現率が高いと報告がある田山（2008：1039）。「実（大）」は成功や達成感・充実感を示す指標である。したがって、本研究の調査対象が中学3年生で高校受験による進路意識の高まりなど、学校生活における達成感・充実感が背景にあると考えられる。本研究の「実（大）」と田邊（2007：169）の「実（多）」の結果から、バウムテストの特徴に共通性がある。以上のことから、自尊心の高さの心理特性とバウムテストの特徴の関連性が示唆された。

6. 今後の課題

本研究結果に基づき、投映法のバウムテストと標準化された質問紙法をテストバッテリーすることで、児童・生徒の心理的特性が把握できると推測される。今後、バウムテストを学校臨床場面で使用する際、質問紙法との併用がきわめて有効である（田山 2008：1033）。したがって、バウムテストが広く児童・生徒を対象として、教育の現場で有効視されることにより、その実践が可能であろう。バウムテストの導入により、教師やスクールカウンセラーが、児童・生徒の心理状態について自信喪失や学校生活に満足していないなど、不適応状態を早期に発見する（山岡雅博 2008：144）ことも可能であろう。さらに、不登校や心の悩みを抱える生徒の心理学的側面を窺える手段としても有効性があると考えられる。

本研究では、バウムテストに表れる自尊心の特徴について、中学3年生と女子大学生を比較した。その結果、一致しなかったことから、バウムテストの特徴は発達的变化をすると考えられる。この結果は、小椋 2021a で検証した小学校4年生と女子大学生の比較研究と同様の結果であった。山下（1982：23）は、児童の発達の側面の研究としてコッホの追試を行った。わが国の幼稚園児・小学生および中学生の樹木画を基礎資料として、樹冠と幹の高さの比率の年齢的变化を明らかにした。さらに、その発達指標の有効性について吟味した。また、空間関係の描写の発達を検討している（小椋 2021a：30）。前述から、生徒の発達の側面の評価として、児童期の研究で示した結果と同様に、発達遅滞と退行の指標の検討が必要であると考えられる。本課題は第1報告としてまとめた児童期の課題と共通するものと言及できる。

文献

- 蘭千尋・遠藤辰夫・井上祥治編, 1992, 『セルフ・エスティームの心理学』 ナカニシヤ出版.
- カール・コッホ／林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳), 1970, 『バウムテスト — 樹木画による人格診断法—』 日本文化科学社.
- カレン・ポーランドー, 2010, 『樹木画によるパーソナリティの理解』 ナカニシヤ出版.
- 花沢成一・佐藤誠・大村政男, 2006, 『心理検査の理論と実際 — 第VI版—』 河台出版.
- 井上信子, 1987, 「小・中学生における優越・劣等意識 — 自由記述法による検討—」 『相談学研究』 19 (2) : 38-43.
- 粕谷貴志・川村茂雄, 2004, 「中学校の学校不適応とソーシャル・スキル及び自尊心との関連 — 不登校群と一般群との比較—」 『カウンセリング研究』 37 : 107-114.
- 北山陽子・窪木恵子, 1988, 「バウムテスト — 描画に表れる性差と発達指標に関する検討—」 『桐花教育研究所紀要』 1 : 17-24.
- 国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・斎藤通明, 1980, 『バウムテスト整理表』 日本文化科学社.
- 村田陽子, 2002, 「セルフ・エスティームと黒 - 色彩バウムテストとの関連性」 『山口大学心理臨床研究』 2 : 89-97.
- 中島ナオミ, 2006, 「コッホのバウムテストに関する基礎研究—樹種の分類と大阪地方における分布—」 『関西女子短期大学紀要』 16 : 1-8.
- 小椋佐奈衣, 2021a, 「子どもの心理評価のためのバウムテストの有用性 — 児童用コンピテンス尺度テストバッテリーによる検討—」 『こども学の探求』 2 : 22-31.
- 桜井茂男, 1986, 「児童における共感と向社会的行動の関係」 『教育心理学研究』 34 : 342-346.
- 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親, 2010, 「日本におけるバウムテストの変遷 — バウムテスト文献レビュー (第一報) —」 『岐阜大学カリキュラム開発研究』 28 (1) : 12-20.
- 佐藤淑子, 2009, 『日本の子どもと自尊心 — 自己主張をどう育むか—』 中央公論社.
- 田中彰吾, 2008, 空間象徴の理論的基礎づけ—身体性の観点から— 東海大学総合教育センター紀要 28 : 1-14.
- 田邊敏明, 2007, 「教師による児童の行動評定とバウムテストの特徴との関連 — 学校適応のあるべき姿を求めて—」 『研究論叢. 芸術・体育・教育・心理』 57 : 169-184.
- 田山淳, 2008, 「中学生における登校行動とバウムテストの関連について」 『心身医』 48 : 1033-1041.
- ウルスラ・アヴェ＝ラルマン, 2006, 『バウムテスト—自己を語る木: その解釈と診断—』 川島書店.
- 山岡雅博, 2008, セルフ・エスティームを育成するライフスキル教育・教師のための学校カウンセリング 有斐閣 第8章, 144-145.
- 山下真理子, 1982, 「バウムテストの発達の研究 — 樹冠と幹の発達の傾向および空間関係の描写について—」 『教育心理学研究』 30 (4) : 23-28.
- 山本真理子 (編)・堀洋道 (監修), 2001, 心理測定尺度集 I — 人間の内面を探る 〈自己・個人ない過程〉 — サイエンス社.

The Usefulness of Baum Test for Psychological Evaluation of Children (II): Focusing on the Relationship with the Self-Esteem of the Third Year of Junior High School

OGURA Sanae

Abstract: Baum's test has been used in clinical and educational settings as an adjunct to personality assessment. The purpose of this study is to examine the relationship between self-esteem and the characteristics of Baum's test for children. This survey was conducted on public 4th-grade elementary school students and 3rd-grade junior high school students. I have already reported in a paper on the subject on 4th-grade students of a public elementary school. This study was conducted on 210 third-year students of a public junior high school, who were administered a test battery of the Self-Esteem Scale and the Baum Test. Based on the number of valid Baum's test scores, the self-esteem scale scores were classified into the low score group and the high score group. The rate of occurrence of each index of Baum's test was tabulated for both groups. Statistical analysis of the significant difference in the incidence between the two groups was performed using direct probability calculation. The results showed that the low-scoring group had significantly higher occurrence rates of the tree's "overall position (left)," "branch (single line)," and "crown outline (pear) (circle)" than the high-scoring group. On the other hand, the high-score group had a significantly higher incidence of "fruit (large)" and tended to have higher occurrence rates of "crown outline (arcade) (other)" and "trunk (thick)" than the low-score group. The results of this study suggest that there is a relationship between self-esteem and the characteristics of the Baum test in junior high school students.

Keyword: Junior high school third grade, Self-esteem, Baum test, Test battery